

シンポジウム開催について

将来構想担当理事 川嶋太津夫

【企画趣旨】

2020年初春に中国武漢から一気に世界へと感染が拡大した新型コロナウイルス(COVID-19)は、日本でも同年2月3日のダイヤモンド・プリンセス号乗客の感染事例以降、瞬く間に感染の輪を広げ、3月からの小中高の臨時休校に続き、大学の卒業式の縮小実施や休止が相次ぎ、加えて感染者増に伴い多くの大学では入学式も取りやめになり、4月7日にはついに感染者が急増していた7都府県に緊急事態宣言が発せられ、同月16日には全国に対象が拡大され、さらに緊急事態宣言は5月31日まで延長するとされたが、幸いにも5月25日には宣言が解除された。

その後も断続的にまん延防止等重点措置と緊急事態宣言が発出される状況が続き、2021年1月の大学入学共通テストでは感染のため本試験を受験できない受験生に従来の追試を2回目の本試験とし、さらに追試を設定した。また各大学の個別入試でも追試の設定や別日程への振替などの配慮を行う事態となった。

このような状況の中、新型コロナの感染は3密状態(密閉、密集、密接)で起きやすいということから、ほとんどの大学で、入学式を中止し、授業開始も最初の緊急事態宣言期限とされた5月以降に延期を決めていた。しかし、緊急事態宣言が解除されても、通学中や教室での感染が強く懸念されることから、多くの大学がオンラインでの授業提供に切り替えた。

このような大学教育を取り巻く状況の中で、入学式も中止となり、また授業も対面ではなくオンラインでの提供に切り替わったため、その影響は新入生が一番大きかったのではと思われる。テレビや新聞等で報道される新入生の声は、いちども大学のキャンパスに足を踏み入れたことがない。クラブ活動もできないし、何よりも同級生と直に会うことができず、大学生になった実感がわからない、といった不満の声が多かった。中には、大学の施設を一度も使用していないので、授業料を返してほしいと訴える声まであった。

大学中退の要因の研究で著名な V. Tinto によれば、大学中退に至るか否かには二つの側面での大学への統合の存否があるという。一つは「学問的統合 Academic Integration」であり、勉強についていけず、成績不振になると、自ら退学するか、成績不良で大学から退学を命ぜられることになる。もう一つは、「社会的統合 Social Integration」であり、大学という共同体の一員であるという認識に欠け、他の学生との繋がりが希薄で、孤独を感じたときに、学生は不登校になり、やがては退学してしまうという。2020年に大学に入学した新入生は、まさに Tinto のいずれの統合も危うい状況におかれていたことになる。

高校から大学への円滑な移行を実現するための様々な取組の共有や研究を使命とする本学会では、新型コロナ禍における新入生の実態と各大学における支援の取組を明らかにす

るために、会員調査を実施した。その結果の報告に加えて、関西国際大学、明星大学、大阪大学という設置形態や規模が異なる大学での取組事例を併せて報告し、会員間での議論に資するとともに、会員の所属大学での対応の参考とすべく本シンポジウムを企画した。

報告者：

濱名 篤 氏(関西国際大学)

菊地 滋夫 氏(明星大学)

村上 正行 氏(大阪大学)

山田 剛史 氏(関西大学)

藤本 元啓 氏(崇城大学)